

〈逆接〉を表す「て」をめぐる

江 口 匠

論文要旨

接続助詞「て」には多くの用法が存在するが、その逆接を表す場合については十分な分析がなされていない。逆接用法の存在は指摘されているものの、例えば「文脈から判断される」程度の記述で、その構文的条件、意味的派生過程に関する考察はほとんどなされていない。

そこで、本稿では「て」の〈逆接〉を統語規則・語彙的制約から3分類し、構文的条件を明らかにすることを試みた。それに併行して、類義形式と捉えられ得る「が・けれど」「のに」と比較し、それらとの相違と「て」の〈逆接〉の独自性について考察した。

〈逆接〉を表す「て」は以下の3つに整理できる。①シテ節とその主節とで一つの慣用句的表現として成立する「XしてXしない〔ふり／顔〕をする」構文で表され、Xには「知る」「見る」「聞く」が用いられる。既に知覚した事態にもかかわらず知覚していないように装うことで、〈逆接〉として解釈されることから《偽装》型と名付ける。②「XしていてYする」構文で表され、Xに「知る」「わかる」、Yに動作動詞が用いられる。動作の対象にとって不都合だと承知の上で行動を起こすことで、〈逆接〉らしさが生まれることから《敢行》型と呼称する。③指示表現や数詞が共起し、「XしてYしない」「XしてYするのか」「XしてYする〔補文標識〕Zである」(Zは評価を表す述語)の3構文のいずれかで表される。一般論と現実の状態・属性とが相反することで〈逆接〉と捉えられ、その有り様に対して話者が意外・不満の感情を抱くことから《意外性》型と呼ぶ。以上3つとも、構文的・意味的に一定の型があることがわかった。

キーワード 【「て」(テ形)、逆接、慣用句的表現、敢行、指示対象の特定】

1. はじめに

接続助詞「て」¹⁾は日本語において多用され、節と節との間で多様な意味関係を表し得る。意味関係としては、手段・方法、様態、継起、起因、逆接、並列などが想定され²⁾、「て」自体の意味が希薄であることから、どの用法に属すかは「文脈」に依存する、「前後の事態の意味」に依存するなどと言われている³⁾。

基本的な助詞であるため先行研究も多いが、逆接を表す接続表現の研究において「て」が注目されることはほとんどなく、一方で「て」が関わる接続法・複文研究においても、逆接の用法に関する記述はそう多くない。これは、文脈から判断されたときのみ「て」は逆接と判断できる場合がある、という半ば定説化した扱いに起因すると考えられる。

しかし、文脈から判断されるといっても、統語的な規則や述語の語彙的な制約など、逆接を表す「て」に何かしらの構文的条件は存在するはずである。そこで本稿では、逆接を表していると解釈できる「て」の構文的条件は何なのか、および「て」によって接続された節同士の意味関係について、事例を挙げながら考察・分析を試みる。併行して、逆接を表す代表的な接続形式「が・けれど」⁴⁾「のに」などの逆接条件表現と比較検討することで、逆接を表す「て」の独自性を顕在化することも目的の一つとして考える。

2. 先行研究

2.1 先行研究の概観

前章で触れた通り、逆接を表す「て」の存在は認知されているものの、研究はほとんど行われていない。管見の限りでは、条件表現に関する研究において、逆接を表す「て」については全く触れられていないに等しい。また、接続助詞「て」、中止法、活用論、等位・並列節などを主題とした研究書・論文において逆接用法の「て」の分析・考察は質量ともに少なく、逆接の用法は存在が示唆される程度であることが多く、何が原因となって逆接の解釈が表出するのかは明らかになっていない。とはいえ、「て」を逆接と解釈できる場合について、言語事実的な特徴を言及したものはいくつか存在するので、それらを次節で概観する。

2.1.1 言語学研究会・構文論グループ (1989a)

「なかどめ——動詞の第二なかどめのばあい——」⁵⁾

言語学研究会・構文論グループ (1989a: 11) (以下、構文論グループと略記する) は⁶⁾ 動詞連用形 (「し」) と動詞連用形に接続助詞「て」が付いた形 (「して」) を「なかどめ」という名称でまとめ、後者の「して」を「第二なかどめ」と名付けている。「し」と「して」が「なかどめ」という一範疇にまとめられる根拠は、「し」と「して」は「意味的にも機能的にもかさなりあいがみられるから」だと述べられている。

構文論グループ (1989a) は「第二なかどめ」による接続法を可能な限り細かく分類しており、逆接の用法に関しては (13) 節 (pp.36-42) の「原因・結果的な関係」で「《うらめ条件》」(pp.40-41) として述べられている。「原因・結果的な関係」とは、「第二なかどめ」として接続する先行動作が原因として働き、後続する動作がその結果を示しており、先行動作が後続動作の成立条件として機能しているともいえるだろう。「《うらめ条件》」が「原因・結果的な関係」の範囲に属している理由は、先行動作が後続動作の原因や動機づけとして作用していないことに起因する。すなわち、後続動作の成立条件たるべき先行動作が条件づけとして働いていないとも言換えられる。

この《うらめ条件》は、原因や動機づけとして作用しないことから、成立するはずの後続

動作を表す動詞が打消の形をとったり、成立するはずの状態と語彙的に反対の状態を表す動詞をとったりする (p.40) と指摘されている。とはいえ、この接続法の成立は「偶発的であって、文法的に確立しているとは、かならずしもいえないだろう」と構文論グループ (1989a) は述べている。例としては、以下が挙げられている (下線は構文論グループ 1989a による)。

- (1a) 行かせたくないというのが弥吉で、人にアテにされて、顔を出さないでは義理にかけると主張したのが、おとくであったことも意外だが、結局、おとくの正論が通ったのである。
- (1b) 信吾はぎくつとした。そのことを忘れていたのは、まったく救いがたいと思った。山の音をきいて、なぜそのことを思い出さなかったのだろう。
- (1c) 「そうそう、近所の日まわりの花を見てね。いよいよその必要がありそうだ。ネクタイのしめ方を忘れてたりして、今に新聞をさかさまにみて、平気にいるようなことになるかもしれないよ」
- (1d) 「自分でいって、わすれるやつがあるか」
と、主任は声をたてずに笑った。

2.1.2 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐる」

仁田 (1995:88) は、シテ形接続の用法を〈付帯状態〉〈時間的継起〉〈起因的継起〉〈並列〉の4つに分類し、いわゆる逆接の用法は《逆条件》として「〈起因的継起〉の周辺関係に属している」と述べている (なお、当論文に記載はないが、〈 〉は「基本となる意味関係」、《 》はそこから派生した「周辺の意味関係」を指すと思われる)。

〈起因的継起〉は、「主たる事象実現の起因であるということにおいて、副次的事象が主たる事象実現の条件として働く〈条件づけ〉の一種である」(p.120 より。本節における以下の「 」内も同様) と述べている。《逆条件》を〈起因的継起〉の周辺関係として位置付けているのは「主たる事象実現の条件として、通例ならば、作用するはずの副次的事象が、有効に働いていない」用法であるものの、「本来的には条件であること」が理由である。

基本的に「《逆条件》⁷⁾」は、前件事象と後件事象の成り行きが「非順当関係」にあるとしている。一方で、シテ節での表現事象がその主節表現事象にとっての成立条件ではなく、シテ節と主節とが「対立関係」にあれば、《逆条件》から逆接⁸⁾にずれ込んでいくと述べている。これらの例として ((2a) (2b) は、例文・下線ともに仁田 1995:120 による)、

- (2a) 自分で注文しておいて、…女は先刻から黙って考えている風であったが……⁹⁾
- (2b) あなたがたはここでも木を見て森を見ない、大きな錯覚を起こしている。

を挙げている。(2a) は注文したら食べるのが自然であるのに、前件から順当な展開を見せていない (= 非順当関係)。(2b) では、シテ節表現事象がその主節表現事象にとっての成立条件にはなっていると言い切れない (= 対立関係)。シテ形接続による《逆条件》と《逆接》は、二事象の関係の捉え方によって意味関係が異なりを見せてくると述べられている。

2.1.3 日本語記述文法研究会編 (2008)『現代日本語文法 6 第 11 部複文』

日本語記述文法研究会編 (2008: 163) (以下、『複文』と略記する) は、「テ形が逆接に用いられている場合は限られており、むしろ文脈から逆接であると判断され」、「従属節と主節の主体が同じ」であり、「主節が否定形または否定的な評価を意味する表現であることが多い」と指摘している。逆接と解される理由としては「従属節から引き起こされるはずの前提事態が起こらず、逆の事態が成立している場合には、逆接の意味を表すことがある」(p.285) と述べ、2 つの中止法のうち、「逆接や順接条件を表す場合は、テ形のみ用いられ、連用形は現れない」¹⁰⁾ (p.288) と言及している。例としては、以下のようなものが挙げられている (以下、注記がない限り、下線は全て本稿執筆者によるものであり、一重下線:「て」従属節 (以下、シテ節と略記する)、波線: シテ節にとっての主節とする)。

- (3a) あんな事故にあつて助かったのですか。本当に運がいい人だ。 (p.163)
- (3b) そんなにお酒を飲んで酔わないなんて、すごいですね。 (同上)
- (3c) 事件の現場にいたにもかかわらず、見て見ぬふりをした。 (同上)
- (3d) 中学入試の問題は簡単そうで、なかなか解けない。¹¹⁾ (同上)
- (3e) わかっていて言わないなんて、ひどい。 (p.279)
- (3f) 悪事を見て見ぬふりをするのは、卑怯なことだ。 (p.285)
- (3g) 本当のことを知っていて教えてくれなかったらしい。 (p.286)
- (3h) こんなにおいしいお菓子を作って売らないとはもったいない。 (同上)

2.1.4 吉田妙子 (2012)『日本語動詞テ形のアスペクト』

吉田 (2012) は、テ形の接続用法を 8 つに分類した。「〈並列〉〈対比〉〈付帯状態〉〈先行〉〈手段〉〈原因・理由〉〈逆接〉〈結果〉」(p.33) が相当する。〈逆接〉用法については、

- (4) 「この椅子に座って体が痛くならないなんて、随分タフだね」 (p.51)

という例を挙げて、「通常の因果とは逆の読みができ、テをノニで言い換えることが可能であり、いわば『起因性』を裏から見た用法である」(p.51) と指摘している。すなわち、〈逆接〉とは前件から推測される事態と反する事態が後件において表現される接続法であり、接続形

式をノニで言い換え可能かどうかが重要だと述べているといえる。

吉田（2012）ではこれ以上の記載はないので、「『起因性』を裏から見た用法」という記述を上記の（4）に則して本稿執筆者が補足を試みる。（4）では「この椅子に座る」→「体が痛くなる」という、話者の前提的予測事態を裏切って、実際の事態「この椅子に座る」→「体が痛くならない」という、予測事態と逆の結果が生起していることが、事態同士の意味関係を〈逆接〉と解釈できる所以だといえよう。

2.1.5 仁田義雄（2014）「テ形」（『日本語文法事典』より）

仁田（2014：421）は、テ形の用法の一つとして「逆接的なつながり」を挙げている。特徴として「逆接の場合、状態性の述語が多い。この用法は「テモ」で表され、テ形はさほど多くない」と述べ、例としては以下を取りあげている。

(5a) 「彼は知っていて教えてくれない」

(5b) 「顔は優しくて、心は鬼だ」

(5c) 「あれだけ叱られて、まだやめない」

2.2 指摘と問題点の整理

以上、逆接を表す「て」に関する先行研究を概観した。まとめると次のようになる。

- ①前提的に予測される事態と逆の結果が生起¹²⁾。
- ②条件表現の下位に属す接続法であり、前件事態が成立条件として機能していない。
- ③節同士の関係が非順当関係が対立関係であり、捉え方によって異なる（仁田 1995）。
- ④起因性を裏から見た用法であり、テをノニで言い換えることが可能（吉田 2012）。
- ⑤従属節と主節の主体が同じであり、主節が否定形または否定的な評価を意味する表現であることが多い（『複文』）。
- ⑥状態性の述語が多く、テモで表されるのが自然（仁田 2014）。

①は逆接を表す表現全般に共通して当てはめられ、多くの研究者によって同様の指摘がなされている。〈逆接〉の規定に大きく関与する重要な事実である。また、②は構文論グループ（1989a）、仁田（1995）、『複文』らにおいて共通の理解であり、逆接表現の体系を考える上では重要であろう。

しかし、③の指摘と④の指摘は異なる点がある。それは、どこまでを逆接と規定しているかである。吉田（2012）における「〈逆接〉」は、仁田（1995）における「《逆条件》」と同様のものを指すと考えられるが、「〈逆接〉」には当てはまらない。言い換えれば、吉田（2012）

は逆接という概念を広く捉えており、仁田(1995)は狭く捉えているのである。

このような見解の齟齬が生じないために、次章では逆接とはどのような概念を指すのか、なぜ逆接と解されるかを見ていき、本稿における逆接を規定する。

3. 逆接という概念の規定について

前述したように、仁田(1995:88)は逆接の用法を、「《逆条件》」と「逆接」の2つに分けている。「《逆条件》」すなわち、「非順当関係」の逆接におけるシテ節事態は、主節事態の成立に大きく関与していると考えられ、吉田(2012)の「〈逆接〉」に相当すると思われる。しかし、「逆接」すなわち、「対立関係」の逆接におけるシテ節事態は、主節事態の成立に対して大きな影響を及ぼしているとは考えにくく、シテ節事態と主節事態に因果関係は存在しない。吉田(2012:51)の「〈逆接〉」は「起因性を裏から見た用法」と定義されているが、主節とシテ節に因果関係が存在しない仁田(1995)の「《逆接》」とは相容れるものではない。以下に、吉田(2012)の例と仁田(1995)の例を再掲し、意味関係の差異を比較する。

(6a) この椅子に座って体が痛くならないなんて、随分タフだね。 ((4)を再掲)

(6b) 「あなたがたはここでも木を見て森を見ない、大きな錯覚を起こしている」
((2b)を再掲)

(6a)は「この椅子に座る」という行為が成立条件となって「体が痛くなる」という事態が引き起こされることが話者にとって前提として予測される。しかし、実際には「体が痛くならない」という予測と逆の結果が生起している。これが逆接として捉えられる所以である。

一方、(6b)の「木を見る」という行為は「森を見る」という行為の成立を導くとは考えにくい。では、何がシテ節と主節の意味関係を逆接たらしめているのか。それは、述語の動き・状態・属性の対象が同一の範疇にあるにもかかわらず、述語の肯否あるいは意義が反対であることが原因だと考えられる。

もう少し詳しく見ていくと、(6b)の「木」と「森」は類似関係あるいは包含関係にある。この例の「て」が逆接として解釈されるのは、同質のものは同じような行為を受ける（もしくは同じような状態である）という予測——「木を見れば森を見る」——と相反する事態——「木を見て森を見ない」——が実際の事態として示されているのが原因である¹³⁾。

まとめると、話者の予測を裏切った結果が主節事態に表現された際に、「て」は逆接の意味関係を表示し得るといえる。その中に、①シテ節表現事態が成立条件となって生起する事態と逆の結果が主節事態に表現された用法と、②主節とシテ節とで同質のモノが述語の対象・主題となっている場合、シテ節事態と同様の動き・状態・属性が主節において表現され

なかった（もしくは相反する動き・状態・属性が表現された）用法の2つがあると規定できるだろう。以下、この定義に相当する意味関係を〈逆接〉と表記する。

4. 〈逆接〉を表す「て」の3分類

接続助詞「て」が結ぶ事態同士が〈逆接〉を表していると解釈できる用例は、容易には想像しにくい。それはとりもなおさず、「て」自体には事態同士の意味関係を積極的に表示する力がなく、〈逆接〉を表す「て」が何らかの制約のもとに表現されることを示している。この4章では、〈逆接〉と解される「て」が、どのような構文的条件のもとに表現されているのか実例を挙げながら考察しつつ、意味的に〈逆接〉として捉えられる原因は何なのかを述べていく。併せて、挙げられた例の接続助詞「て」を「が・けれど」「のに」と置き換えた場合、どのような差異が見出されるかについて比較対照を行い、〈逆接〉を表す「て」という表現の独自性を分析する。

4.1 分類の方法

先に結論だけ述べておくと、〈逆接〉を表す「て」は統語的な規則・語彙的な制約からいくつもの文型に分けられ、〈逆接〉らしさを導く要因は意味的に3分類される。単純で分かりやすいものから解説すると理解が早まると考えられるため、構文的自由度が狭い用法から順に述べていくことにする。

3つのタイプは〈逆接〉の意味的な下位分類であることから《 》で示すことにする。以下に概略を述べる。①は「XしてXしない〔ふり／顔〕をする」という慣用句的表現において表される。Xには知覚動詞「知る」「見る」「聞く」が用いられ、それが述部となる。知覚したという事実を否定し、知覚していないように偽り装うことから、これを《偽装》型と呼称する。②は「XしていてYする」という構文で表され、Xには「知る」「わかる」¹⁴⁾などの認知を表す動詞、Yには様々な動作動詞が述語として用いられる。主節で表現される動作の対象にとって不都合だと承知の上で、敢えてそれを行うことから、これを《敢行》型と呼称する。③は、否定文「XしてYしない」か、ノカ疑問文「XしてYするのか」か、シテ節とその主節が連体修飾節内や引用節内に配置される「XしてYする〔とは／なんて／のは／というのも〕Zである」(Zは評価を表す述語が入る)のいずれかの構文を要求するものである。このタイプでは、指示表現などの対象を特定する表現がシテ節に用いられ、その対象に関する評価表現が共起する。シテ節事態から話者が予測する帰結と実際の帰結が相反しており、実際の帰結に対して話者がこれを《意外性》型と呼称する。

4.2 例文の出典・収集方法

次節以降では3分類した〈逆接〉について詳述していくが、それにあたって可能な限り実例を用いる。そこで、本稿に記載した例文の出典・収集方法について概略を述べる。

出典が明示されていない用例は本稿執筆者による作例である。()の外に★を付すことによって、他の用例と区別した。出典を明記したものは、先行研究における用例、および、青空文庫で検索した実例である。前者は先行研究の著者による作例と思われる用例が多いが、本稿執筆者が〈逆接〉と判断できたものを引用した。

また、例文を検索するにあたって、『青空文庫全』を使用して約6300件の文学作品を収録しており、掲載されている日本語表現の用例を検索できる「日本語用例検索」(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~tanomura/kwic/aozora/> 2015年9月28日最終検索)を使用した。作成者の田野村忠温の解説によると「検索対象とするデータは粗い機械処理によって生成しており、テキストの内容、著者名、作品名が誤りを含む場合があり」、「論文などへの引用時には書籍ないし青空文庫のサイトでの確認が必要」であるため、検索された用例を改めて「青空文庫」からコピー&ペーストし、フリガナを取り除いた。

《偽装》型の用例収集にあたっては「[ぬ／ん／ない／なかった][ふり／振り]を」の8パターンを検索し、「て」が従属節で用いられた複文を集計したところ、シテ節の述語は「知る」「見る」「聞く」のみが観察された。上記以外の知覚動詞で《偽装》型の表現をする可能性はあるが、実例には現れにくい。その後、「知って知ら」「知っていて知ら」「聞いて聞か」「聞いていて聞か」「見て見」「見ていて見」の6パターンを検索・集計したところ、「XしてXしない[ふり／顔]をする」という構文で表されることがわかった。

《敢行》型は「[知／し]っていて」の2パターンと、「[わか／分か／分／解か／解／判]っていて」の6パターンとで、全8パターンを検索・集計した。

それぞれの用例数の内訳は、《偽装》型：90例（「見る」述語が74例、うち「見てみぬふり」が1例で、他は「見る」は主節・シテ節ともに漢字。「聞く」述語が4例、「知る」述語が12例）、《敢行》型：32例である。なお、《意外性》型に関しては用例収集が難航したため、実例をあまり挙げられなかった。

4.3 《偽装》型

4.3.1 統語的・語彙的な特徴

《偽装》型は、知覚動詞「知る」「見る」「聞く」がシテ節の述語として用いられ、同じ述語の否定形を主節述語として用いる構文に表れる。統語規則を公式化すると「XしてXしない[ふり／顔]をする」¹⁵⁾である。この構文は、主節とシテ節とで一つの慣用句的表現として成立している。以下にいくつかを例示する。

- (7a) お庄の耳には、根強いような婆さんの声が、びしびし響いた。お庄は聞いて聞か
いような振りをして、やっぱり笑っていた。(徳田秋声『足迹』)
- (7b) ただし迷亭に至っては実際知らなかったのか、知って知らん顔をしたのか、そこは
少々疑問である。(夏目漱石『吾輩は猫である』)
- (7c) 自分がこんな憂目を見ている以上、今にきつと源十郎が割って出て、万事をつく
ろってくれるものと信じているのだが、源十郎はお艶のことでいっばいで、左膳へ
橋渡しをすると誓ったお藤との約束はもちろん、いまのお藤のくらしも見てみぬ
ふり、聞いて聞かぬ顔ですぎてきたのだった。
(林不忘『丹下左膳 01 乾雲坤竜の巻』)
- (7d) 自分がこんな憂目を見ている以上、今にきつと源十郎が割って出て、万事をつく
ろってくれるものと信じているのだが、源十郎はお艶のことでいっばいで、左膳へ
橋渡しをすると誓ったお藤との約束はもちろん、いまのお藤のくらしも見てみぬ
ふり、聞いて聞かぬ顔ですぎてきたのだった。
(林不忘『丹下左膳 01 乾雲坤竜の巻』)
- (7e) 真実に知らないのか、知っていて知らない振りをするのか、彼女には分らなかった。
(島田清次郎『地上 地に潜むもの』)
- (7f) あの若い方は、素直な方であるし、自分にとっては、危うきを救われた恩人である。
この場合、知って知らないふりをするのはつらいけれど、思い合わせてみると、そ
の時分から、何かを尋ね尋ねて歩み疲れていた人のようではあった。
(中里介山『大菩薩峠 27 鈴幕の巻』)

これらに共通する特徴として、シテ節と主節の動作主が一致しており、否定を表す表現が必ず共起するという点が注目される。《偽装》型の統語的・語彙的な特徴は以下の表にまとめられる。

表 1：《偽装》型の統語配列

シテ節述語	接続形式	主節述部	否定の表現	述部末尾
知っ	て	知ら	ない	ふりを する
見		見	なかった	
聞い		聞か	ぬ	
	ていて		ん	顔をす る

4.3.2 意味的な特徴

《偽装》型の慣用句的表現においては、「事態を知覚したならばその知覚行為を偽装することはない」という予測を裏切っていることが、〈逆接〉らしさの所以である。ただし、知覚行為は主節表現事態の成立を導いているわけではないため、条件的な接続関係はない。形式上は述語の肯定・否定の対照から打消関係が窺えるが、意味的には現実と理想の対立である。「見る」を例に考えてみると、見たくないものを「見た」のが現実であるが、動作主の理想としては「見なかったことにしたい」ために「見ない（見なかった）ふりをする」という偽装を図るのである。言い換えれば、《偽装》型は現実と理想の矛盾関係を「て」で接続しているものであり、それが〈逆接〉という解釈につながるといえる。

また、「X しない [ふり／顔] をする」という行為は、既に「X した」という事実を含意している。X に「見る」を当てはめて考えれば、何らかの指示対象を「見なかったふりをする」ときは、既にそれを「見ている」のである。それは (7e) のシテ節に見られるように、テイル形式を伴う場合があることからわかる。いずれにせよ、「X しない [ふり／顔] をする」が生起したときには、既にシテ節事態が完了していることに違いはない。

4.3.3 類義接続形式との比較

では、このような逆接的關係を「て」で表現する特質は何なのか。「て」で接続された例と、主な逆接接続形式「が」「のに」と置き換えた例とを比較検討してみよう。以下に例を掲げる（作例には★を付した。以下同様）。

- (8a) 悪事を見て見ぬふりをするのは、卑怯なことだ。
- (8b) ?悪事を見たが見ぬふりをするのは、卑怯なことだ。¹⁶⁾ ★
- (8b') ?悪事を見たが見なかつたふりをするのは、卑怯なことだ。 ★
- (8c) 悪事を見たのに見ぬふりをするのは、卑怯なことだ。 ★
- (8c') 悪事を見たのに見なかつたふりをするのは、卑怯なことだ。 ★

((8a) は (3f) 再掲、(8b') (8c') は文法的に据わりを良くするための改変)

「て」以外の接続形式の場合は慣用句的でない¹⁷⁾。(8a) と (8b') ((8c')) の例を比較すると、シテ節は「悪事を [見て見ぬふりをする]」という構造だが、「[悪事を見たが]、[見なかったふりをする]」「[悪事を見たのに]、[見なかったふりをする]」になり、句としての固着度に差異が見受けられる。

また、(8a) の「見て見ぬふりをする」の場合、「見る」という知覚行為をしてから短期間のうちに「見ぬふりをする」という偽装行為を行っているように思われる。しかし、(8b') (8c') のように「て」を「が・けれど」「のに」で置き換えた場合、時間的に隔たりのある

既然のことに對して「見なかったふりをする」という行為を行っているとも解釈できる。すなわち、「て」は前件から後件への繼起的な關係を表す表現であるために、前件事象が行われたら短期間のうちに後件事象が行われなければならないことが窺える。それに対して「が・けれど」「のに」は「見る」という行為の事後であればよく、前件事象から短期間のうちに後件事象が行われる、という印象はないように思える。これは、「が・けれど」「のに」の方が節の区切れが明確に表されていることが原因だろう。

また、「て」よりも「のに」の方が反発心・對抗心を表したような意味合いが強まってくる。そこから、「見なかったふりをする」ことに對して話者が反発している、という感情がより明示的に表現されていると考えられる。

4.4 《敢行》型

4.4.1 統語的・語彙的な特徴

《敢行》型は、シテ節に「知る」「わかる」のような認知を表す動詞が述語として用いられ、なおかつその述語がテイル形式をとって表される。主節述語は基本的に動作動詞が入ると考えられる。公式化すると「X していて Y する」となり、X には「知る」「わかる」が入り、Y には関与者に不都合をもたらす動作動詞が入り得る。例としては以下が挙げられる。

- (9a) 本当のことを知っていて教えてくれなかったらしい。 ((3g) 再掲)
- (9b) だが、その童話を私の作品だと市木さんが知らない筈はなかった。知っていて黙っていたのである。 (豊島与志雄『絶縁体』)
- (9c) 「行かん筈はないでしょうが、貴娘、知っていて、まだ私の前に、秘すのじゃないかね。」 (泉鏡花『婦系図』)
- (9d) 「(前略) それに、うちは長女や。嫁に行けるからだとちがう。それを知ってて、勝手にそんな話を決めてしまうのは、長屋の娘や思て、あなどってるのやろ。うちはあなどられても構(かめ)へんけど、お祖父ちゃんが可哀想や」 (織田作之助『わが町』)
- (9e) 「万一、ストライキにでもなってみたまえ。僕たちは、表面朝倉先生を慕っているように見えて、実は先生を侮辱していることになるんだよ。ストライキのような卑怯な手段で先生に留任してもらうなんて、そんな……そんなひどい侮辱を先生に与えていいと思うのか。それも、先生の辞職の理由が僕たちにわかっていなければ、まだいい。わかっていてストライキをやるなんて、あんまりひどすぎるじゃないか。」 (下村湖人『次郎物語 04 第四部』)

とはいえ、シテ節述語が「知っていて」「わかっていて」であれば全て〈逆接〉を表すか

というそうではなく、シテ節述部が主節述部を修飾していなければならないという制約がある。上記の例は、主節とシテ節とが文法的に対等というわけではなく、主節に対して副詞的に働いているといえる¹⁸⁾。したがって、この用法におけるシテ節の意味的タイプは、副詞節だと考えられる。そのため、「知っていて当然だ」「知っていてすごい」のように、シテ節が「当然だ」「すごい」のような当為表現・評価表現に接続している場合は〈逆接〉と解釈されることはない。

また、以下の例では「て」を〈逆接〉として用いられず、「が」「ても」「のに」などの形式でなければ〈逆接〉として自然に表現し得ない。

(10a) *彼らを買めても意味はないとわかっていて、そうしなければ気が狂いそうだった。

★

(10b) 彼らを買めても意味はないとわかっていたが、そうしなければ気が狂いそうだった。

★

(10c) 彼らを買めても意味はないとわかっている、そうしなければ気が狂いそうだった。

★

(10d) 彼らを買めても意味はないとわかっていたのに、そうしなければ気が狂いそうだった。

★

この場合の用法でも、シテ節表現事態から予想される結果と主節表現事態（＝現実における表現事態）が非順当の関係にあり、話者による条件判断がなされている。以下のような例として表現すれば適格文として認められるだろう。

(11) 彼らを買めても意味はないとわかっている責め立てた。そうしなければ、気が狂いそうだった。

★

(9) (10) (11) を見ると、《敢行》型の主節述語は言い切りの形になるか、連体修飾節や引用節内に置かれなければならないことが観察される。また《偽装》型と同じように、この用法においても主節とシテ節の行為者が同一であるが、主節述語は必ずしも否定を表す表現は共起していない。以上、以下の表に概略をまとめる。

表 2：《敢行》型の統語配列

シテ節述語	接続形式	主節述語
知っ	ていて	動作動詞
わかつ		

4.4.2 意味的な特徴

このタイプを《敢行》型と名付ける所以は、動作の対象にとって不都合である（と話者が思う）行為を承知の上で行うことにある。(9e)を例として再掲して分析すると、

- (12) 「万一、ストライキにでもなってみたまえ。僕たちは、表面朝倉先生を慕っているように見えて、実は先生を侮辱していることになるんだよ。ストライキのような卑怯な手段で先生に留任してもらうなんて、そんな……そんなひどい侮辱を先生に与えていいと思うのか。それも、先生の辞職の理由が僕たちにわかっていなければ、まだいい。わかっていてストライキをやるなんて、あんまりひどすぎるじゃないか。」
 ((9e) の再掲)

「先生」にとって不都合であると思われる行動「ストライキ」は「ひどすぎる」と考えられる。つまり、話者は主節事態が行われることに対して、否定的な評価を下しているのである。この(12)は、日本語記述文法研究会(2008:163)における「主節が否定形または否定的な評価を意味する表現であることが多い」という指摘の後半部分、「主節が否定的な評価を意味する」と一致した用例である。とはいえ、前述の(9a)のように上述指摘の前半部分「主節が否定形」を意味する表現である場合も《敢行》型には見られるため、否定形も否定的な評価を表す述語も表れ得る。

4.4.3 類義接続形式との比較

4.3.3 節に倣って記述を進めていく。《敢行》型では、「が・けれど」への置き換えは難しいが、「のに」には容易に置き換えられる。以下の2例を掲げる（(13a)は(9e)の再掲）。

- (13a) 「万一、ストライキにでもなってみたまえ。僕たちは、表面朝倉先生を慕っているように見えて、実は先生を侮辱していることになるんだよ。ストライキのような卑怯な手段で先生に留任してもらうなんて、そんな……そんなひどい侮辱を先生に与えていいと思うのか。それも、先生の辞職の理由が僕たちにわかっていなければ、

- まだいい。わかっていてストライキをやるなんて、あんまりひどすぎるじゃないか。」
(13b)「おれは、日本艦隊を撃滅するのをたのしみに、はるばるこんな海底までやってきたんだ。勝目は、はじめからわかっているのに、いつまでもぐずぐずしている司令官の気持がわからない。明日攻撃命令を出すというが、ほんとうか、どうか、いつもがいつもだから、あてになるものか」
(海野十三『太平洋魔城』)

(13a) は相手に不都合だと知っている上で、意図的に教えないようなニュアンスしか感じられないが、(13b) のような「のに」を用いた例だと、やむを得ない事情から教えられなかったという読みもできる。この考察から《敢行》型の構文では、主節事態が意図性を持った行為になると考えられる。一方で、「のに」は意図性の判断よりも先に、主節事態の動作主に対して話者が反発的な感情を抱いており、それが表面化しているように見える。

4.5 《意外性》型

4.5.1 構文的な特徴

《意外性》型は前述の《偽装》型や《敢行》型と比べて、述語の語彙的な制約が緩和されているが、レベルを異にする構文的条件が存在する。1つは、固有名詞や指示表現（に「だけ」「にも」「ほど」「まで」などが後接する場合も含めて）や数詞、職業を表す名詞など、その他比較の目安となる表現（以下、比較元と略記する）が従属節に必ず用いられるという制約である。もう1つが、主節が否定文の構文であるか、主節がノカ疑問文の構文であるか、シテ節にとっての主節が「とは」「なんて」「のは」「というもの」などの補文標識が共起し、シテ節とその主節とが引用節・連体修飾節として埋め込まれなければならない¹⁹⁾ という制約である。《意外性》型の構文を公式化すると、①「X して Y しない」②「X して Y するのか」③「X して Y する [補文標識] Z である」(Z は評価を表す述語が入る) のいずれかである。また、上記の3構文はいずれも、固有名詞・指示表現・数詞・職業名詞など、比較元となる指示対象を特定する名詞句が共起されなければならない、という共通の制約がある。例は以下が挙げられる。

①「X して Y しない」

- (14)「あれだけ叱られて、まだ部屋を片付けない」 ★

②「X して Y するのか」

- (15a)「それほどの力を持っていて、なぜこのような手段をとったのか」 ★

- (15b)「あんな事故にあって助かったのですか。本当に運がいい人だ」 ((3a) を再掲)

③「X して Y する [補文標識] Z である」(Z に二重下線を付した)

- (16a)「ここまで面倒を見てもらって、そのような態度をとるとはいいい度胸だ」 ★

- (16b) 「この椅子に座って体が痛くならないなんて、随分タフだね」 ((4) を再掲)
(16c) 「そんなにお酒を飲んで酔わないなんて、すごいですね」 ((3b) を再掲)
(16d) 三十五歳にもなって一人では淋しいというのも、おかしい話だ。階下の奥の室には、
母と圭一とが寝ている。 (豊島与志雄『好人物』)

(14) や (15a) では、主節述語が動作動詞であるが、前者は反語によって「そのような人物ではないはずだ」という意味合いを含意していると考えられ、後者は「そのような性格だ」という憤慨・諦観などの話者の感情が含意される。これらは、主節で表現されるような行動から状態・属性を判断し、主題となっている人物に評価を下しているのである。

また、《敢行》型と同じく、この用法においても否定形が共起した場合と否定的な評価を意味した表現が共起する場合の2つがある。(15a) (15b) (16a) (16d) は話者が主節事態に対して否定的な評価を下している場合であり、(14) (16b) (16c) は否定形が共起している場合である。このタイプにおいても、否定形も否定的な評価も出現し得る。

4.5.2 意味的な特徴

上記の3構文を《意外性》型と名付けて一括する理由は、これらは全て話者が主節の動作主に対して意外・不満の感情を抱いていることにある。また、《意外性》型は、シテ節事態が成立条件となって生起する事態と逆の事態が主節において表現されている。《敢行》型と同じく、吉田(2012)における「〈逆接〉」、仁田(1995)における「《逆条件》」と同一の範疇に入り得る。しかし、シテ節から予測される帰結と実際の事態が相反していることが〈逆接〉らしさを生み出しているという点で、《敢行》型と異なる。以下に例を再掲する。

- (17a) 「あれだけ叱られて、まだ部屋を片付けない」 ((14) 再掲)
(17b) 三十五歳にもなって一人では淋しいというのも、おかしい話だ。階下の奥の室には、
母と圭一とが寝ている。 ((16d) 再掲)

(17a) は、主節の動作主がいつまで経っても「部屋を片付けていない」ことで「何度も叱られている」、もしくは「ひどく叱られている」ということが推測される。一般的に考えてそのような状況ならば、「部屋を片付ける」と話者は予測するのだが、実際には「部屋を片付けていない」のが(17a)が示している事態である。つまり、「あれだけ叱った」なら「部屋は片付ける」という予測が話者の中にあったが、その予測とは逆の結果が生起したのである。(17b) も同様の推論過程を経ている。「三十五歳である」なら「一人でも淋しくない」と話者は予測するが、それとは逆の結果が生起しているのである。

このように、《意外性》型においては「一般的に推測される状態」と「実際の状態」を比

較して、予測と矛盾した帰結がなされていることが〈逆接〉の解釈を導いており、表現上は述語の指示対象となる人物へ評価を下した用法だと言える。

4.5.3 類義接続形式との比較

この用法の「て」を他の接続形式と置き換えると、以下のようになる（(18a) は (14) の再掲、(18b) (18c) はその改変）。

(18a) 「あれだけ叱られて、まだ部屋を片付けない」

(18b) 「*あれだけ叱られたが、まだ部屋を片付けない」

(18c) 「あれだけ叱られたのに、まだ部屋を片付けない」

この用法では「が・けれど」は逸脱性を有し、「て」と「のに」の意味的な差異はほとんど見受けられない。このタイプにおいては、「のに」の方が「て」で接続するよりも反発的な感情を前面化させている程度だろうか。

5. おわりに

以上、〈逆接〉を表す「て」の構文的条件とその意味的特質を見てきた。表にまとめると以下のようになるだろう。

表 3：〈逆接〉の「て」における 3 用法のまとめ

	シテ節述語の特徴	主節述語の特徴	備 考
《偽装》型	「知る」「見る」「聞く」	～ない〔ふり／顔〕をする	シテ節と主節とで、一つの慣用句的表現として成立
《敢行》型	「知る」「わかる」	動きの関与者にとって、不都合となる動作動詞	シテ節が～ティテ
《意外性》型	特に制限はない	打消や反語・反論などの表現が共起	①「X して Y しない」 ②「X して Y するのか」 ③「X して Y する〔補文標識〕Z である」(Z は評価語) の 3 つの構文があり、いずれも特定の対象を指す名詞句が共起

本稿は〈逆接〉を表す「て」には一定の型があることを明らかにした。しかし、〈逆接〉を表現する形式の体系化を新たに考え直すことや、「ながら」「つつ」などの「て」とよく似た接続形式との差異は何が考えられるかを検討する必要がある。今後の課題としたい。

注

- 1) 日本語教育などでは、活用形の一つとして「テ形」と分類し、テ形は従属節を形成すると説明されることが多い。本稿では一般的日本語文法に従い、接続助詞「て」が接続機能を果たしているという立場に立つ。
- 2) 『日本語文法事典』（pp.420-421）より。
- 3) 本稿執筆者の調べた限り、辞典類では『日本文法大辞典』『基礎日本語辞典』『日本語表現・文型辞典』『助詞・助動詞の辞典』『日本語文法事典』、論文・研究書では『現代日本語文法 6 第11部複文』が挙げられる。また『日本語文法大辞典』では、古典語の「て」の用法を列挙するに留めている。なお古代語ではあるが、山口（1980：258）は条件関係（いわゆる逆接も含む）を表す「て」は、「て」自体が条件関係を明示するのではなく、「文脈に依存」して解釈されると述べている。結論としては、本稿執筆者もこの解釈を支持する。
- 4) 「が」と「け（れ）」は異なる接続形式だが、文体や一部の統語機能には差異がある一方で意義差はほとんど見られないため、本稿では同一の扱いとした。以後同様。
- 5) 当論文では《 》で括られる用語が頻出するが、その意味・規定は特に述べられておらず、規則性の判断も難しいため直接引用に留めるように努めた。
- 6) 正確には、奥田靖雄が属した「言語学研究会」の立場であろう。言語学研究会（のメンバー）は形態論的に、助詞・助動詞を独立の単語とは認めず、名詞、動詞、形容詞の文法的要素として捉えている。鈴木（1972）も参照。
- 7) 同種の接続形式としてシテモ節とシタノニ節を挙げている。
- 8) 「非順当関係」の《逆条件》と違い、ガ節に近似した用法だと述べている。注7も参照。
- 9) 仁田（1995）はシテ形接続の一つとして例を挙げているようだが、「～しておいて」という一つの接続形式として捉えるべきだろう。これについては別稿を予定している。
- 10) 一方で、逆接の用法は「テ形が多く、連用形には少ない」（p.286）とも記載されており、一貫した記述がなされていない。
- 11) 『現代日本語文法 6 第11部複文』において逆接用法のテ形として挙げられた例だが、「簡単そうで」は助動詞ソウダの連用形とも捉えられる。これについては、別稿を予定している。
- 12) 逆接という概念を考える上で重要な考え方である「前提」の質的な異なりは、石黒（1999）に詳しい。
- 13) 石黒（1999）における「包含関係を前提」とした逆接と同様である。
- 14) 本稿執筆者の内省では「気づく」も入ると思われるが、実例では見出せなかった。
- 15) 肯否が対立していればよいというわけではない。前件述語を否定形、後件述語を肯定形で表現する、ということとはできない。「*見ないで見たふりをする」は非文であり、「見ていないのに見たふりをする」が適格文である。
- 16) 適格文としての許容度に疑問があるのは、「見た—見なかった」というタ形同士の対応が自然であるにもかかわらず、「見た—見ぬ」という対応で表現されていることによると思われる。
- 17) 「が・けれど」「のに」は「見る」の対象となるヲ格名詞（句）を伴わなければならないが、「て」の場合は「見て見ぬふりをする」のような慣用句的表現で一つの動詞句を形成するため、ヲ格名詞（句）を伴う必然性はなくなる。
- 18) 日本語記述文法研究会編（2008）によると、テ形の従属節は等位・並列節とされている。
- 19) 《敢行》型の例（9d）（9e）もこの構文と重なっているが、上記の例は、「X して Y する。」と終止形で言い切っても非文にならないことが《意外性》型との大きな差異である。《意外性》型

の場合、連体修飾節を取り除いて表現すると非文になる。

【補注】

本稿を投稿後に森田良行 (2006)『日本語の類義表現辞典』を見出したので、簡略に追記する。

「見て見ぬふり」と「見ても見ぬふり」の差異を比較し (pp.292-295)、「『見て見ぬふり』とは、見ても見ぬふりをするものであるから、この『て』は逆接の『ても』に相当する。確かに『て』は、後に続く事柄次第では逆接的な意味になる」(p.293)と述べ、「見て見ぬふり」の「て」は前後の意味関係によっては「逆接的な意味」を持ち得ることを指摘している。

【参考文献】

- 石黒圭 (1999)「逆接の基本的性格と表現価値」『国語学』198, pp.129-114
- 江口匠 (2014)『接続表現の歴史的研究』学習院大学卒業論文 (指導・安部清哉教授)
- 大堀壽夫 (2014)「複文²」日本語文法学会 (編)『日本語文法事典』(大修館書店), pp.540-542
- 言語学研究会・構文論グループ (1989a)「なかどめ——動詞の第二なかどめのばあい——」『ことばの科学 2』(むぎ書房), pp.11-47
- 言語学研究会・構文論グループ (1989b)「なかどめ——動詞の第一なかどめのばあい——」『ことばの科学 3』(むぎ書房), pp.163-179
- 小池清治・小林賢次・細川英雄・山口佳也 (編) (2002)『日本語表現・文型事典』(朝倉書店)
- 国語学会編 (1980)『国語学大辞典』(東京堂出版)
- 坂原茂 (1985)『日常言語の推論』(東京大学出版会)
- 白川博之 (2014)「接続助詞」日本語文法学会 (編)『日本語文法事典』(大修館書店), pp.351-352
- 鈴木重幸 (1972)『日本語文法・形態論』(むぎ書房)
- 田窪行則 (1987)「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5, pp.37-48
- 仁科明 (2014)「順接と逆接」日本語文法学会 (編)『日本語文法事典』(大修館書店), pp.296-298
- 仁田義雄 (1995)「シテ形接続をめぐって」仁田義雄 (編)『複文の研究 (上)』(くろしお出版) 所収, pp.87-126, 仁田義雄 (2010)『日本語文法の記述的研究を求めて』(ひつじ書房) 再録, pp.233-270
- 仁田義雄 (2014)「節」「中止法」「テ形」日本語文法学会 (編)『日本語文法事典』(大修館書店), pp.346-348, pp.402-403, pp.420-421
- 丹羽哲也 (1998)「逆接を表す接続助詞の諸相」『人文研究』(大阪市立大学) 50-10, pp.91-125
- 日本語記述文法研究会編 (2008)『現代日本語文法 6 第 11 部複文』(くろしお出版)
- 前田直子 (2009)『日本語の複文』(くろしお出版)
- 益岡隆志 (2014)「従属節 (従属句)」『複文¹』日本語文法学会 (編)『日本語文法事典』(大修館書店), pp.266-267, pp.537-540
- 益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法』(くろしお出版)
- 松村明編 (1971)『日本文法大辞典』(明治書院)
- 南不二男 (1974)『現代日本語の構造』(大修館書店)
- 南不二男 (1993)『現代日本語文法の輪郭』(大修館書店)
- 森田良行 (1989)『基礎日本語辞典』(角川書店)
- 森田良行 (2006)『日本語の類義表現辞典』(東京堂出版)
- 森田良行 (2007)『助詞・助動詞の辞典』(東京堂出版)
- 山口明穂編 (2001)『日本語文法大辞典』(明治書院)

山口堯二 (1980) 『古代接続法の研究』 (明治書院)

吉田妙子 (2012) 『日本語動詞テ形のアスペクト』 (晃洋書房)

【付記】

本稿は、古典語の機能語・接続助詞（逆接用法）に関して取り上げた卒業論文（参考文献参照）で気づいた問題点を現代語にも広げて、現代日本語での「て」の逆接用法を考察したものである。当初の小さな着眼に対して、安部清哉先生にはさらに発展的な問題点をご提示いただき、稿を成す過程でも論理や表現を整理するなどご指導いただいた。前田直子先生にも接続表現のご研究のことなどでご助言いただいた。査読委員会のご指導もいただき、修正を加えた。全てのお名前を記すには紙幅が足りませんが、投稿までの過程で、本稿に対してご助言・ご指摘してくださった先生の方々、研究室の方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

ENGLISH SUMMARY

“te” as contradictory conjunction

EGUCHI Takumi

The conjunction “te” has many usages. It is said that contradictory conjunction “te” is decided from the context, however its syntactic and semantic feature don’t become apparently.

Therefore, I classified the contradictory conjunction “te” into three types from vocabulary terms and syntactic rules. Besides, through comparisons of synonyms with “te” as contradictory conjunction, “ga” and “noni”, I emphasize the characteristic of it.

The first type involves, «pretending». It is represented by the following sentence structure: “XshiteXshinaihuriwosuru”. Verbs such as “miru”, “kiku”, or “shiru” are placed where there is an X. From that we pretend to not recognize a situation, though we were recognized, I named it «pretending». The second type involves an, «intentionally act». It is represented by sentence structure: “XshiteiteYsuru”. Verbs such as “siru” or “wakaru” is placed where there is an X, and a different verb is placed where there is a Y. From that we take action on the agreement that it is inconvenient for an object of an agent. I called it «intentionally act». The third type involves a, «comparing». It is that demonstrative or numeral co-occur contradictory conjunction “te”, and it is represented by sentence structure: either “XshiteYshinai”, “XshiteYsurunoka” or “XshiteYsuru [toha, nante or noha] Zdearu”. From that a reality contradict a condition is generally supposed, I named it «dissatisfied». Finally, this paper introduced that “te” as contradictory conjunction has three types which is syntactically and semantically different.

Key Words: “te” (te-form), Contradictory conjunction, Idiomatic expression, Intentional action, Specifying object